

レポート・第24回日本李登輝学校台湾研修団

台湾と中華民国について学んだ五日間

会社員 永石 佳衣

第一日 11月6日(金)

平成二十七年十一月六日、第二十四回日本李登輝学校台湾研修団は三十五人の参加者を以て始まりました。団長を務められたのは辻井正房さん、副団長は竹石淳子さんです。参加者の中には、台湾の情勢や歴史に長けた方も多くいらつしやいましたが、李登輝基金会で行われた始業式の場において、李登輝学校教頭の王燕軍先生よりご挨拶を賜り、それから五日間に亘る研修の始まりを認識すると、自然に背筋が伸びる思いがしました。

台湾総統選挙を目前に控えた今回の研修のテーマは「台湾と中華民国」。

第一講は、東京新聞台北通信員でもあ

るジャーナリストの迫田勝敏先生による「二〇一六年台湾総統・立法委員選挙について」。参加者の誰もが関心を寄せるテーマからの始まりでした。十一月六日時点での選挙情勢を、時に先生ご自身の見解も交えながら、事細かにご説明くださいました。

初日の晩は「海中天」にて、迫田先生を交えた夕食会が開かれました。参加者全員が初対面という中でのお食事会でしたので、普段あまり緊張するところのない私も流石に緊張し、困惑した中での参加となりました。けれど、同じ円卓にいらした辻井団長よりお気遣いいただき、台湾ビールとお料理の美味しさも相まって、楽しい一時を過ごすことができました。

終盤に参加者一人ひとりの自己紹介の時間があり、ここで初めて皆さんがどのような思いでこの研修団に参加されたのかをお聞きしました。少し安堵すると同時に、しっかりと学ぶ五日間にしよう、と改めて奮起しました。

第二・三日 11月7・8日(土・日)

二日目は朝の便にて、金門島へと向かいました。野外研修の始まりです。

かつては国共内戦の最前線で、「戦争の島」として知られた金門島を訪れることは、中華民国体制と台湾について学ぶ上で大きな意味を持ちます。

私たちは馬山観測所より、二キロ先に迫る中華人民共和国の地を肉眼で捉えました。地理的には、台湾本島より遠く離れ、文化も風土も異なるこの島は今や多くの中国人観光客を受け入れる島でもあり、見渡す限りの高粱畑が広がるのどかな島のあちらこちらに、島民の数にはおよそそぐわぬ数のマンションを目にしました。それらの多

くは、投資目的の中国人によって購入されているとのことでした。こうした光景も、正に今の台湾を象徴するかのようで、興味深く感じるとともに、この島の複雑さを強く感じました。

複雑さという意味で、強く印象に残っているのが映画「軍中楽園」の撮影にも使われた老街です。一見すると、台湾によくある普通の老街だったので

すが、その一角に茶室と呼ばれる店が一軒ありました。銭湯の番台のような入口を抜けると、薄暗い中にベッドと鏡台が並んでいました。慰安婦たちがいた場所です。

三日目に、資料館となっている特約茶室展示館も訪れました。そこには、



迫田勝敏先生（第1講 11月6日）



金門島の特約茶室資料館（11月8日）

かつて施行されていた利用上のルールや料金などが明示され、当時、どのような女性が従事していたかも示されていました。いずれも、観光客が普通に足を向けることができるようになっていきます。日本ではあまり多くが語られない史実を、台湾においてはこれほどまでオープンにしている、私はそこに強い衝撃を受けました。

二日目の夜は、信源海産店という海鮮料理のお店に伺い、金門島名物という筒の形状をした巻貝をいただき、食べるのに苦労しました。これは貝の両サイドより、中身が出てくるまで交互に強く吸うようにしていただくそうなのですが、吸っても吸っても中身はな



羅福全先生（第3講 11月9日）

かなか出て来ず、途中で諦めてしまう方もいました。ただ、そのように皆さんと試行錯誤しながらいただいたことは、大変楽しかった思い出です。

またこのお店で、やはり金門島名物の高粱酒もいただきました。これはアルコール度数五八度もある非常に強いお酒です。乾杯を繰り返す風習のある台湾ならではの小さなグラスで少しずついただきました。

三日目は古寧頭戦史館、翟山坑道、鋼刀店等を見学した後、夕方の便で台北へと戻りました。

第四日 11月9日(月)

四日目は、羅福全・元駐日代表によ



黄天麟先生（第4講 11月9日）

る第二講「安保法制と日台関係」から始まりました。駐日代表という経験を踏まえた視点からのお話は、日本人にその認識の甘さを痛烈に知らしめる内容でした。日本と同様に敗戦国となったドイツは第二次世界大戦後、自国民により憲法を制定しましたが、日本は米国によって憲法が制定されました。この違いは何なのでしょうか、と。

安保法制について、私自身あまり深く理解しているとは言えませんが、私と同世代の台湾人は、中国に対し非常に強い危機感を抱くとともに、台湾人であろうとしている。そんな事実を改めて耳にしながら、日本人としての自分を顧みました。

第三講は、台日文化経済協会の黄天麟^{りん}会長による「馬政権の経済政策と日台関係」でした。二カ月後に迫った総統選を前に、メディアでも馬英九政権の経済政策について様々な議論がなされていましたが、黄先生は李元総統の頃からの台湾の経済情勢の変化を数字

で示しながら、馬総統の「経済政策は何もない」と、その評価は極めて厳しいものでした。

また、小さな経済体は大きな経済体に吸収されるといふ、先生オリジナルの磁吸理論に基づき、今の中国はブラックホールだと指摘し、中国の経済的危険性をご教示くださいました。

第四講は、台中市にある東海大学^{ちんぐほう}日地域研究センター主任の陳永峰先生による「若い知日世代から見た李登輝哲学」。李登輝先生について語られた書籍は多々あります。しかし、哲学的考察は初めて耳にしたため、非常に新鮮でした。「我是不是我我（私は私でない私）」。李元総統は一人の間でありながら、個人としてではなく、常に公人としての責務を担ってこられたというその姿勢を改めて認識し、強い感銘を受けました。

淡水の李登輝基金会にて行われた講義の後は、いよいよ李登輝元総統の特別講義。私たちは台北市内へ移動し、

華泰王子大飯店のバンケットルームにてその時を待ちました。緊張する私の目に入ってきたのは、お元気そうな李登輝先生のお姿で、非常に感激しました。そのような場で、私は若輩の身でありながら、先生に質問させていただきました。「日本では、政治に関心を持たない若年層が増えていますが、どうすればこうした状況は改善されるのでしょうか？」と。

先生のお答えは極めて明確でした。一つ目は、待機児童の問題であれ、労働条件の問題であれ、問題を問題として認識すること。二つ目は、そうした問題意識が国政に反映されるよう選挙区制度を見直すこと。確かに、不満を口にしながらも、改善するための行動に移すことはない私たちの問題点の所在を確実に認識した気がしました。

講義後、李登輝先生ご自身より、研修団全員に修了証が授与されました。中には、感激のあまり涙をこぼされる方も。私自身も、非常に興奮したのを

覚えております。

第五日 11月10日(火)

最終日は交流協会台北事務所を訪問し、沼田幹夫・代表による「日台関係の現状と展望」と、蔡焜燦先生の「老台北放談」を伺いました。

二カ月後に迫った総統選挙に関し、沼田代表は民進黨が勝つであろうことを強く認識した上で、折しも研修二日目の十一月七日、中国共産党のトップである習近平と馬英九とが対面した通称「馬習会」がシンガポールで開かれましたが、選挙日から就任式までの四カ月に亘る空白の期間について懸念を示し、また政権を譲ることになった国

民党が中国の圧力を受け、馬總統在任中に何かするかもしれないと、強く懸念されていました。他方、親日派の蔡英文氏が当選すれば、日本は台湾とそれまで以上に友好的な関係を築くことが期待されることでした。

研修の締めとなる蔡焜燦先生も「馬習会」について強く嘆かれ、こうした時勢の中、蔡先生は、知日、親日、愛日、懐日と、それぞれの視点から日本に対する台湾人の思いをご教示くださいました。知日、親日、愛日までは私たちにも理解できます。けれど、懐日というのは、蔡先生や李元総統含め、日本時代を生きた台湾人にしか分かりえない感覚なのだろうと感じました。

そして、先生方が思いを寄せる日本はかつての日本であって、その頃の日本人は、今の私たちよりも遙かにきれいな日本語を話し、教養もあり、気骨のある方々だったと思います。今の私たちが模範とすべき「人としての在り方」を、台湾に来て学びました。

研修中、移動や休憩時間の間に、他の参加者の皆さんともいろいろなお話をさせていただきました。職業も年齢も違う方々から、今の台湾に対するさまざまなご意見も伺いました。社会人の先輩としてのご意見もたくさん賜りました。講義をしてくださった先生方だけでなく、五日間をともしに過ごした皆様からも多くを学んだ研修でした。



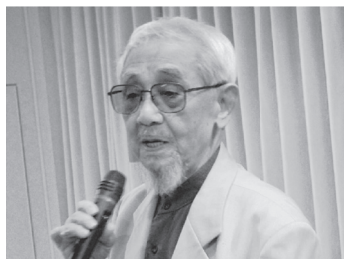
陳永峰先生 (第4講 11月9日)



李登輝先生 (第5講 11月9日)



沼田幹夫先生 (第6講 11月10日)



蔡焜燦先生 (第7講 11月10日)